

— 連載 —

美術館のある風景 (第5回)

展覧会のなりたち〈その一〉

三菱一号館美術館 館長 高橋 明也



今年の三菱一号館美術館の展覧会ライン・アップは、すでに前回紹介されたように、まず1月30日から始まる「ザ・ビューティフル—英国の唯美主義1860-1900」です。19世紀後半のイギリスを覆った美的生活への気運を、ロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館の所蔵品を中心に重層的な構成で初めて紹介する国際展です。イギリス人建築家によって建てられた三菱一号館の建物と完璧にシンクロする内容は、話題になることでしょう。そして6月には、パリからアムステルダムを巡回して丸の内にやってくる、「ヴァロトソン—冷たい炎の画家」が始まります。19世紀末から今世紀初めにかけてフランスで活躍した、特異な魅力に溢れる画家フェリックス・ヴァロトソン(1865-1925)の、我が国初の大規模な回顧展です。妖しい、独特の魅力に溢れるスイス生まれのこの画家に対する評価は、近年世界的に高まっています。さらに秋になれば、ボストン美術館所蔵のミレーの傑作の数々が、バルビゾン派の画家たちの佳品とともに「ボストン美術館 ミレー展—傑作の数々と画家の真実」として姿を現します。ミレーという、明治期以来日本人に大変親しまれてきた画家を、アメリカとの関わりの中から新たな視点で見直す企画です。

いずれの展覧会も、きわめて充実した内容を持っていますが、実は、こうした展覧会の企画はなかなか一日にして成ることは難しく、通常は何年

にも亘る試行錯誤と交渉の末にようやく実を結ぶこととなります。例えば、2014年の現在、私たち一号館美術館のスタッフが少しずつ検討を重ねているのは、2016年、17年、18年のプログラムです。でも当然のことながら、視野の先には、オリンピック・イヤー2020年までもが入っています。

世界が情報化・均一化に向かっている昨今、あらゆる分野で同じような傾向が見られるのかもしれませんが、美術展は今、転機を迎えています。かつては欧米各国の美術館を中心に、お互いの所蔵品を貸し合いながら地道に、研究的な性格を強く持ちながら作られてきたのですが、近年は日本を筆頭に、アジアや中東、南米やオセアニアの新興国が加わり、世界的にも商業的・興行的な展覧会が急速に増えています。そして当然、そこには競争が生じます。しかしながら、歴史的に著名な作品や誰もが知っている名作は限られているので、特定の有名作品は引っ張りだこになります。とはいえ、セキュリティや作品保護の観点からみても、一部の作品だけが常に展覧会に出品されるのは大きなリスクです。どんな美術館や所蔵家もそれには二の足を踏みます。そこで、作品を出品してもらうためにしばしば、金銭あるいは政治的な手段を含むさまざまな駆け引きが行われることになるのです。展覧会で繰り広げられる美の世界は、必ずしも美しいものばかりで満たされているとは限りません。